



第2章 地域づくり支援と自治体史編纂

木村, 修二 ; 三村, 昌司 ; 石川, 道子 ; 坂江, 渉 ; 村井, 良介 ; 河野, 未央 ; 添田, 仁 ; 前田, 結城 ; 佐々木, 和子 ; 深見, 貴成 ; 板垣, 貴志 ; …

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 9(平成22年度事業報告書):25-39

(Issue Date)

2011-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002926>



第2章 地域づくり支援と自治体史編纂

大学協定にもとづく灘区との連携事業

本年度は、本事業に関して主だった動きはなかった。なお 2005 年度に制作した『篠原の昔と今』、および 2006 年度制作の『水道筋周辺地域のむかし』の両冊子は、本年度も断続的に配布依頼が続いた。2011 年 2 月 28 日現在での残部は『篠原の昔と今』は約 450 部、『水道筋周辺地域のむかし』は約 130 部となっている。

(文責・木村修二)

神戸市文書館との連携事業

2006 年度より始まった神戸市文書館との地域史料の収集整理・公開・活用に関する共同研究事業を今年度も継続して行った。文書館の開館日である月曜日から金曜日の午後 1 時から 5 時まで、森田竜雄・樋口健太郎・吉原大志の 3 名が事業を担当した。また、2010 年 12 月から、板垣貴志・川内淳史の 2 名が別に古文書整理にあたった。

事業内容としては、以下のとおりである。①館蔵資料(古文書・複製資料)の台帳整備。文書群ごとに来歴、点数、所蔵形態(原文書、マイクロ、ネガ、コピー等)、目録の整備状況、配架場所などの情報を整理した。②館蔵古文書の再整理。具体的には、山脇家文書と井上好太郎家文書の再整理を行った。山脇家文書については一般公開し、HP にも史料群の情報が掲載された。③館蔵古文書を利用した企画展の実施。2010 年 11 月 8 日(月)～26 日(金)「兵庫運河のあゆみー八尾家文書を中心にー」の展示・配布物の作成を行った。期間中 219 名の来館者があり、これは昨年の企画展来館者 134 名を大幅に上回り、地域連携センターが企画展にかかわるようになったこの 3 年間で最高の来館者数だった。④市民のレファレンス対応への協力。

来年度も、館蔵資料(古文書・複製資料のほか、図書・写真・行政文書も含む)の総合的なデータベース構築(上記の①②はその一環です)支援と、館が『新修神戸市史』編纂で借用し、そのままになっている古文書の措置について助言をし

ていく予定である。また企画展への協力や、新たに整理の必要が生じる文書群についても対応をしていく。

最後に、長らくの懸案である平日午前の開館実施については、今年度も実現がならなかった。館に対し引続き要望していくとともに、企画展や HP の充実などで文書館の持つ史料情報などを発信し、館の存在意義をより周知していく必要があるだろう。(文責・三村昌司)

神戸市企画調整局との連携事業

昨年度より開始された神戸市が保有する阪神・淡路大震災関連資料の整理作業を今年度は本格化させた。2010 年 4 月には「国立大学法人神戸大学大学院人文学研究科と神戸市企画調整局との震災関連資料の整理等に関する協定書」を締結し、(財)神戸都市問題研究所分室(以下、分室)において資料の目録作成と保存方法について専門知識の提供を行った。

分室では、市職員二名、神戸大学から三名、そのほか作業員が常時五名程度という体制で作業にあたっている。なお、神戸大学からは、水本有香・板垣貴志・吉川圭太の三氏が作業を担当した。

作業の状況は、分室に搬入された資料については簿冊目録の作成が完了し、件名目録作成に着手している段階である。また、分室に搬入されていない資料について、企画調整局によれば、2006 年に神戸市が行った調査をもとに所管局において次年度より目録作成を開始する予定である。

また、2010 年 11 月 11 日には奥村弘・佐々木和子の両氏が神戸市役所において震災関連資料・公文書管理についての講義を行い、2011 年 3 月 11 日には佐々木和子・水本有香両氏が震災資料の活用について、神戸市役所内での研究会において報告を行った。(文責・三村昌司)

神戸市を中心とする文献史料所在確認調査

本年度該事業の主な活動は以下の通りである。

(1)中央区北野地区・西脇家文書への対応

西脇家文書は、2010 年 5 月に同家のご意志によって人文学研究科に寄贈された。本文書群は、2006 年度以来当センターによって調査・整理を行ってきたが、所蔵者である西脇美代子さんがご

自宅での保管に困難と判断されたことに加え、その後西脇さんやそのご友人らと始めた「西脇家文書研究会」の活動に取り組んできたことも縁となり、本学への文書群のご寄贈を申し出られたのである。今後同文書群は、人文学研究科古文書室に保管される。

なお所蔵者とそのご友人とともにやってきた「西脇家文書研究会」は、今年度もおよそ月1回のペースで継続してきた。同会は今後も継続予定である。

(2)「北野村古文書さとがえり展」

西脇家文書が、本学に寄贈されたのを記念し、北野の地元で古文書の展示会を開催することとなった。開催日程は、2010年11月3日(火・祝)から6日(土)の4日間。場所は、神戸北野天満神社境内にあるイベントスペース「北野プラムテラス」を、同神社のご厚意で借りることができた。

本来、古文書を展示できる設備がない会場だったが、短期間での開催でもあり、一部の文書を除いて、会場備品のテーブルを並べた上に、文書をひろげ、上から透明のテーブルクロスを被せる形をとった(宝塚市山本共有財産組合との連携)。



また、絵図の一部は、アルミフレーム付パネルに入れて、壁に掛けたものもあった。さらに、冊子ものなどの文書については、神戸市教育委員会より拝借した展示ケース2台にディスプレイした。これらを、会場の形態を勘案しつつ配置し、パネル解説を多用する形で、展示会場を設えた。

観覧者数は、約350名だった。北野天満神社や地区内にある浄土宗浄福寺にもご協力いただき、案内ちらしを氏子や檀家に配布していただくなどしたこともあってか、地元の方々のご参加も多かったが、当地を離れた元住人の方が来られたケースも少なからずあった。

アンケートも実施し、68名の方々から様々な感想が寄せられた。全てを紹介できないが、とりわけ多かった感想としては、北野の地にこうした古文書が大切に保管されてきたことに驚いたという感想や、古文書の実物をみることでできたこと、明治以前の北野村のことを初めて知ったという感想などがあつた。また、こうした展示会が当地にかぎらず数多く開かれることを望んだ意見もみられ、小さくとも現地で開催される展示会が、地域調査・研究の成果発表の手段として有効かつ需要もかなりあることがわかった。

今後、北野地域とどのように関わっていくかは未定だが、同神社がパネルによる展示の恒常化などを要望されており、これに協力するなど今後も関係を継続してゆきたい。

(3)兵庫区平野地区における活動

本項目は、第3章の「歴史資料ネットワークへの協力」の項で詳述する。(文責・木村修二)

財団法人住吉学園との連携事業

財団法人住吉学園との連携事業は、学園が管理している住吉歴史資料館(本住吉神社境内に所在)の運営を中心として進められている。その運営は、学園より要請された地元有志が中心となっており、当センターはそのサポートを専門的な立場から行っている。

なお、2010年12月28日に、当センターと住吉学園との関係構築以来、多大なご配慮をいただいていた、同学園理事長の本田隆志氏が病気により急逝された。この場を借りて、哀悼の意を表したい。2011年1月9日、住吉学園幼稚園において、同学園と本田家との合同葬が執り行われ、奥

村と木村が参列した。

以下、今年度の活動の概要を記す。

(1)『住吉歴史資料館だより』の発行

昨年度創刊号が発行された『住吉歴史資料館だより』は、2010年5月13日に第2号が、2011年2月1日に第3号の発行をみた。いちおう、年2号発行というノルマは果たせた格好だが、発行時期が遅れがちで定期的な発行という目標は達成できなかった。

第2号では、住吉歴史資料館事務局の内田雅夫氏による「住吉歴史資料館の座敷について」と、木村執筆の「江戸時代の西国街道と間之宿・住吉」の2篇が掲載されている。

第3号では、内田氏による「江戸時代末の住吉祭、安政二年のだんじり」と、住吉歴史資料館専門委員でもある松下正和氏の「東求女塚古墳と菟原処女伝承(1)」が掲載された。なお第3号は、逝去された住吉学園理事長本田隆志氏の追悼号とも銘打たれた。

(2)住吉谷水車古写真展の開催



2010年10月24日(日)、住吉歴史資料館内の座敷において、住吉地区の各小中学校生徒を対象とした合同お茶会が開催されたが、これに併せて同館2階で、住吉谷にかつて多く存在した水車場の古写真を集めた展示会を開催した。

開催にあたり、住吉地区在住の嘉納節子氏および徳永道彦氏が所蔵されている写真アルバムの調査を実施し、そこに含まれていた戦前～戦後の水車場を撮したものを中心として31枚の古写真を選び、パネル化するとともに、現在の様子を撮影したものも併せて展示した。さらに、江戸時代の絵図の中から住吉谷の水車場を描いたものもパネル化して展示した。また、水車場を再現した模型

や水車場で実際に使用されていた臼なども展示した。

ただ、残念ながら、わずか1日の開催に加えて、お茶会に参加した小中学生を主な対象としたこと、なんとといっても宣伝不足によって、広く観覧者を得ることができなかった。

なお、2011年2月25日から27日の3日間、地区内の住之江公民館にて、水車場写真展を開催できたが、10月の成果物を再活用できた好事例となった。

(3)文献資料調査

昨年度に引き続き、本住吉神社宮司横田良紀氏所蔵の住吉村文書の整理作業を断続的に実施した。(文責・木村修二)

神戸市東灘区御影石町の木村酒造との連携事業

御影の酒造家木村家の依頼により2008年に預かった近世を中心とした近世・近代史料の目録を、翌09年に『木村家文書目録』として少数部出し、原史料の仮設置場所として伊丹酒造組合(伊丹市)の置かせていただいている。その後近代史料を中心に新しい史料が出てきたため、再度これを預かることとなった。

しかし、置き場所がなく、一部は神戸市文書館に、一部は伊丹所蔵酒造に入るようになった。また、一部が古書店に流れていたため、これは大学で買い取り、あまり分量が多くないので古文書室に入れている。木村家文書の置き場所を整理すると、

伊丹酒造組合(近世史料を中心に古文書箱に12個程度、文書目録あり)

神戸市文書館(近代史料を中心に数箱)

伊丹酒造組合(②のうち近世史料5箱程度)

神戸大学文学部古文書室(古書店より購入、近代史料2箱)

木村家に保管(近世文書、小木箱入り、ほか冊子)

以上のように分割されたかたちで置かれており、①は目録済み、②は置き場所として預かるだけ、とのこと、③は「木村家文書②追補目録」として目録を作成中だが、⑤との関連が深いと思われる、木村氏がこちらに預けられるかどうかあやふやであったので、待ちながら作業を進めているよ

うな状況である。④は「木村酒造文書」として整理中、⑤はご自宅に保管、という複雑なかたちになっている。

当家史料の調査については上記のような状態であるため非常に進めにくいのが現状である。現在の置き場所もあまり時間が経つと状況が把握できなくなるのではないかと心許なく、早く1つにまとめることが必要であろう。

(文責・石川道子)

神戸市水産会との連携事業

第2回「いかなごぎ煮学認定試験」が昨年度の報告書脱稿後の2010年2月28日に開催されているので、まずこの点について。

会場は、神戸市立水産会館。48名が受験し、45名が合格となっている。昨年同様、合格者には「神戸いかなごぎ煮学認定試験」合格認定証を送付している。当センターは、木村が一昨年度の第1回に先だって作成されたテキスト文に加筆したものを提供する形で協力を行った。

今年度は、神戸市水産会〔神戸市漁業協同組合、兵庫漁業協同組合、財団法人神戸みのりの公社、および神戸市〕の中で、第3回を実施するかどうかも含めた協議を行った結果、認定試験という形では第3回をもって最後とすることを条件に、実施する決定がなされた。

かねてより中級編を設けるかどうかという協議もなされたが、これは行わないこととなった。このため、当センターとしては、新たなテキスト作成の必要性はないと判断し、宣伝面での協力(センターHPへの案内掲載)にとどめることにした。

第3回は、2011年の2月20日に垂水区役所で開催されたが、本稿執筆時点(2月28日)で結果が発表されていないため、この点については次年度の報告書での報告に期することとしたい。

(文責・木村修二)

神戸元町商店街連合会との連携事業

神戸元町商店街連合会(みなと元町タウン協議会)との連携関係は、2009年12月に「西国街道モニュメント」の設置事業以来つづいている。

今年度は、神戸港近辺の主要な観光スポットの

掲示板原稿の内容についてのアドバイス(神戸震災復興記念公園・日本近代洋服発祥の地・海軍操練所跡の碑・湊川神社等)を坂江と添田仁がおこなった。

また同連合会の奈良山貴士氏が幹事がつとめる社団法人・神戸経済同友会(平成22年度地域開発委員会)の「『神戸海港都市づくり研究会』(仮称)の設置による戦略的かつ継続的な都市づくりへの提言」(平成23年2月)の作成に関連して、坂江と添田がその文案に関してアドバイスをとおこなった。(文責・坂江渉)

神戸市淡河における連携事業

石峯寺より調査・撮影のため借用していた史料を返却するとともに、新たに発見された襖の裏貼り文書を借用した。昨年度までに調査・撮影を終えていた史料については、目録を作成した。

(文責・村井良介)

よみがえる兵庫津連絡協議会への協力

兵庫津の歴史文化を活かしたまちづくりをめざし、兵庫区の商店主・中央市場・寺院・神社等が発起人となって「よみがえる兵庫津連絡協議会」が発足した。兵庫区まちづくり課も協力を行っている。

2010年6月17日、(株)真野商店会議室で行われた同協議会の例会にて、兵庫津のまちの歴史を学ぶにあたり、河野未央が講師を務めた。松下正和氏もオブザーバーとして参加した。今後ゆるやかな連携を行っていきたいと考える。

(文責：河野未央)

大学協定にもとづく小野市との連携事業

神戸大学と小野市との間では、2005年1月26日に社会文化にかかわる連携協定が結ばれ、それ以来さまざまな共同事業がすすんでいる。今年度の事業内容は、以下の通りである。

1. 小野市立好古館 一平成22年度特別展(地域展)「下東条小学校区の歴史と文化」の開催協力と博物館実習の実施

昨年度までの2年間、毎年夏の「調べ学習」(小学生中心)を踏まえ、秋頃に小野市の来住地

区の歴史文化を紹介する地域展が開かれてきた。今年、2010年10月23日～12月5日を会期にして、同市東部の下東条地区を対象にした地域展が開催されることになった。

ただしこれまでの地域展は、地域内の子供たちの「調べ学習」の基軸にしたものであった。しかし今年度は少しやり方が変わった。下東条地区地域づくり協議会では、地域の活性化をはかるため「下東条地区まちづくり活性化計画」を提言。この中には豊かな自然と歴史をいかしたまちづくりの提言も多く盛り込まれている。そこで地域づくり協議会、各自治会、学校が共同して、地域の歴史調査をおこない、将来的にその成果を「下東条文化財ウォーキングプラン」としてまとめることを決定。今年度の地域展づくりは、こうした作業の一環に組み込まれ、その準備作業の成果の一端を公表する場に位置づけられた。

夏休み以降、今年度の展示会をめざして、基礎的な準備作業として、各地区（おおむね下東条地区に含まれる大字）ごとの歴史文化の聞き取り調査が実施された（今年度の実施地区は、下東条小学校区の中谷町、脇本町、万勝寺町、池田町、曾根町、小田上町、小田下町、船木町の8町）。

神戸大学はこの聞き取り作業に、可能な限り協力し、担当教員の坂江が参加するとともに、博物館実習生の大学院生1名も参加した。

2. 2011年青野原^{ふりよ}俘虜収容所展の開催に向けて

2005年度に好古館で開いた地域特別展「青野原俘虜収容所の世界」展、俘虜たちの演奏会の再現コンサートについては、2008年9～10月、オーストリアのウィーンで「里帰り展示会」を開き、2009年11月には、東京にて「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」を開催した。

これを受けてもう一度、小野市内でこれまでの成果を集大成する計画が持ち上がり、結局、2011年10月、好古館で展示会を開催することが決定。この間、新発見された「収容所」関連の写真資料の調査成果を発表コーナーや、神戸大交響楽団有志による記念コンサートも実施予定である。今年度はこれらの企画の成功に向けて、写真資料の調査分析を中心とする基礎的活動をおこなった。

3. 蓬萊努小野市長との懇談

2010年11月2日、蓬萊小野市長と地域連携推進室長の奥村弘教授、佐々木和子研究員、坂江渉

らが市長室にて懇談した。これまでの共同事業の成果と今後の協力関係の持続を確認するとともに、小野市と大学との連携協定を延長することなどが話し合われた。懇談には、小野市立好古館の西田猛氏も同席された。（文責・坂江渉）

連携協定にもとづく朝来市との連携事業

(1) 生野古文書教室

平成18年度に立ちあげられた生野古文書教室（もと古文書初級教室）の方々が、センターと協力して、「御仕置五人組帳」（生野書院所蔵）の翻刻・現代語訳を行った。

これは、古文書の内容を平易な文章に直すことで、子供でもわかるような冊子にまとめて出版することを目的とした事業である。地元の古文書を読むだけではなく、その成果を市民が市民に還元するという意義を持つ。今年度は、合計12回にわたって、翻刻・現代語訳の作業、意見交換を行った。

もともと今年度中に出版する予定であったが、分量や日程の問題もあり、発行自体は来年度に延期となった。

(2) あさごの歴史と古文書講座



近年、朝来市内では、生野町をはじめとして「古文書を勉強したい」「古文書を読めるようになりたい」という希望者が増えてきた。現在、公民館講座や自主的な活動などにおいて、いくつかの古文書教室が開催されている。各教室では、参加人数やレベルの格差などがあることから、現在以上の新規希望者を受け入れることが困難になってきている。

そこで、平成18年度に朝来市が神戸大学との

連携事業で行った「古文書初級講座」の成果をふまえ、朝来市全域を対象として「あさごの歴史と古文書講座」を開講した。また、同時に古文書に関する相談会も行い、身の回りの古文書についての情報を寄せてもらった。

講座の日程、内容、参加者は以下の通り。

■第1回 平成22年8月21日

□「古代の生野と市川流域」(坂江渉)

①「古文書に触れてみよう」(澤井廣次・神戸大学D1)

→25名参加、古文書相談(1件)

■第2回 平成22年9月18日

□「生野代官所の情報世界」(添田仁)

□「古文書に触れてみよう」(澤井)

→40名参加、古文書相談(4件)

※中世文書については山本康二(神戸大学M2)が対応

■第3回 平成22年11月20日

□「城郭から見た戦国時代の朝来」(西尾孝昌・朝来市文化財保護審議会委員)

□「古文書に触れてみよう」(澤井)

→45名参加

古文書相談(2件)

■第4回 平成23年1月22日

①「自然災害と古文書」(吉原大志・神戸大学D2)

□「古文書に触れてみよう」(澤井)

→16名参加

古文書相談(2件)

講座自体は概ね好評。来年度も引き続き実施する予定である。

(3) 新出古文書の整理

■吉川増太郎文書

(近世文書2箱、近代書簡5箱、民具)

朝来市教育委員会からの依頼。9月11日～12日にセンターで整理し、近世文書の一部(160点)を整理、目録を作成した。

■佐藤家文書

(木箱1箱)

「あさごの歴史と古文書講座(第3回)」で整理の依頼を受け、センターで整理、目録を作成した。

(4) 石川家文書の整理

昨年度に引き続いて、石川家が所蔵する古文書の整理を行った。

所蔵者が移管してきた古文書は、すべて中性紙の古文書箱に詰め、随時、合宿形式で写真撮影を行い、7回で約500点の撮影を行った。

また、石川家が輩出した歴史家・石川準吉関係の資料群の調査を開始した(「石川準吉関係資料の整理」を参照)。

(5) 生野書院・企画展示「再発見 銀山の遺産—森垣村石川家に受け継がれたもの—」

石川家文書の整理事業の成果を市民に還元するために、平成23年2月19日～4月3日、朝来市生野書院・企画展示室において、「再発見 銀山の遺産—森垣村石川家に受け継がれたもの—」を開催した。これは、石川家文書の整理を進めるなかで明らかになった生野銀山や同家の歴史、ならびに同文書群の存在意義について、生野の方々を知ってもらうことを目的として開催したものである。内容の詳細については、図録を参照のこと。

なお、3月5日には、生野メインホールで開催された「全国鉱山シンポジウム～日本を代表する鉱山 佐渡・石見・生野～」のなかで、参加者に展示案内を行った。

(6) 古文書合宿

平成23年2月19日～20日に、生野メインホール・生野書院において、神戸大学文学部・大学院人文学研究科の学生が古文書合宿を行った。

現地の協力も得ながら、シルバー生野の見学、口銀谷・奥銀谷のフィールドワーク、石川家文書の整理、古文書修復の実習、生野書院企画展の閲覧などを行った。

詳細については、「地域歴史遺産活用企画演習」の項目を参照のこと。

(7) まちづくり地域歴史遺産活用講座

平成23年2月19日～20日に、生野メインホール・生野書院において、まちづくり地域歴史遺産活用講座を開催した。

詳細については、「平成22～24年度 地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」の項目を参照のこと。

(文責：添田仁)

丹波市における連携事業

平成21年度に引き続き、今年度も丹波市との連携協定にもとづく事業を展開することができ

た。本年度の事業成果と課題の概要は以下の通りである。

(1) 「講座 丹波の歴史文化を探る—古文書との出会い—」

本年度、新たな取り組みとして「講座 丹波の歴史文化を探る—古文書との出会い—」（以下、連続講座）を開始した。丹波市内旧 6 町それぞれの歴史に関する講座を「現地説明会」方式で開催し、市民の歴史文化に対する関心を喚起することを目的としている。スケジュールは以下の通り

- 6 月 26 日 松下正和「自治会文書からみる柵原村の歴史—地域遺産を守り伝えるために—」（@春日公民館大会議室）
- 7 月 24 日 前田結城「幕末の動乱と在地代官上山家—大新屋上山家文書の世界—」（@柏原公民館会議室A）
- 8 月 28 日 河野未央「水濡れ史料を救う—水損資料修復ワークショップ—」（@中央公民館実習室）
- 10 月 30 日 木村修二「江戸時代における丹波の村—北太田村を事例として—」（@山南公民館）

本講座の参加者からは、毎回アンケートにおいて連携事業の継続を望む意見が寄せられている。また連続での聴講の事例も多数認められる。連続講座はもとより、連携事業そのものへの理解が講座参加者より得られていることの証左といえる。

また古文書相談会では実施者の予想を上回る件数の相談が寄せられている。相談者の中には、地域ぐるみでの史料保全・活用に積極的な方もおられ、そのうち氷上町谷村・春日町歌道谷の両地区では、相談を契機として史料調査の実施にも結びついた。新規の取り組みであったが、参加者からの積極的な反応や古文書相談会の効果を把握することができたといえる。ただし、講座で説明した史料保全の理念が参加者に十分に伝わっているとは言いがたい事例もあり（古文書相談の際、地元史料の引き取り・預託が大学側に要請されるなど）、1 年全 6 回のみでは浸透度に不安がある。来年度も継続して行う必要があるだろう。

(2) 自治会文書調査と旧家・寺社文書調査

自治会文書調査及び旧家・寺社文書の調査も行った。調査・整理・保全作業に着手した地区・文書名は以下の通り。

■自治会文書調査

春日町：柵原区有文書、歌道谷区有文書、坂区有文書・松森区有文書／氷上町：佐中ますみ家文書、谷村区有文書／市島町：中竹田青木家／柏原町：上小倉区有文書／山南町：木戸せつみ家文書

■旧家・寺社文書調査

青垣町：高源寺文書、常瀧寺文書、鶏足寺文書／氷上町：福田寺

■柵原パワーアップ事業推進委員会との協働による区有文書・春日町波多家文書の整理作業が完了した。その後、両文書を素材とした成果物の刊行など、さらなる活用が進められている。その他、山南町木戸せつみ家写真資料の目録作成が完了。山南町梶地区や柏原町上小倉飯谷家文書などの調査結果の一部を、史料翻刻として 2010 年度本事業報告書に掲載予定である。また、春日町松森地区や歌道谷地区、氷上町谷村区有文書など、上記の古文書相談を契機とした新規調査が開始したが、本年度内は「柵原モデル」の拡大までには至らなかった。また、松森・歌道谷地区などは人員・日程の都合により途中で本年度調査を終えたため、調査の継続を検討する必要がある。また 09 年度に調査した山南町奥地区など、調査が 1 回のみで止まっている地区もある。こうした地区のその後の経過も追って確認する必要があるだろう。

(3) 成果物の刊行

本年度は、本事業の成果を書籍として公表することを目標の一つに置いて活動を展開した。その結果、本年度末に以下の 2 冊のブックレットを刊行する運びとなった。

■『古文書からわかった江戸時代の村のすがた』（仮）

- ・柵原区パワーアップ推進委員会・地域連携センター共編
- ・A5 版、100 頁、丹波新聞社発行、1000 部発行、一冊 500 円頒布
- ・主内容：ここまでわかった柵原天満宮の歴史／柵原区有文書「古文書巻」からわかった近世柵原村

■『丹波の歴史文化を探る—古文書との出会い—』（仮）

- ・丹波市教育委員会発行
- ・A5 版、100 頁、市教委・センター共編、有

償頒布

・内容

ごあいさつ／巻頭特集（丹波市の城の魅力を探る：芦田岩男）／史料から探る丹波市城の歴史（北太田村のからかさ連判状：木村修二／竹田川井堰をめぐる中竹田村の史料：木村修二／維新の混乱と在地代官上山治郎右衛門：前田結城／神楽川板橋碑：松下正和／棚原天満神社の神宮寺：松下正和／元治二年、氷上町域を襲った地震について～村々から代官に寄せられた「速報」から～：河野未央）／彙報／編集後記

（4）その他

神大購入丹波関連文書（西谷村・和田村・大河村文書）について、撮影・目録作成が完了した。近く本事業報告書にこれらの史料概要を掲載する予定である。

また、昨年度に引き続き柏原歴史民俗資料館所蔵史料調査も若干なから行った。上山家文書撮影は大半が完了しており、目録化作業進行中である。（文責・前田結城）

連携協定を結んだ加西市との連携事業

加西市鶉野町に残る旧姫路海軍航空隊基地跡の歴史遺産基礎調査を、2009年1月（2008年度）から三カ年にわたって、加西市教育委員会とともに共同研究をおこなっている。

今年度は、最終年度であり、戦争遺跡の保存活用をおこなっている千葉県館山市、熊本県宇佐市の事例調査を実施し、市民とともに活用を考えるシンポジウムを実施した（加西市と神戸大学との連携協定は、2009年5月16日に締結されている）。

戦争遺跡の保存活用調査

東京湾岸に位置する館山市には、明治期以来、首都東京の防衛基地として館山海軍航空隊をはじめ、多くの軍事関連施設が置かれていた。そのため、館山海軍航空隊赤山地下壕跡など、市内には多くの戦争遺跡が存在している。

これらの戦争遺跡については、同地ではNPO法人安房文化遺産フォーラムが、見学コースをつくり、全国からの学校や団体等の平和学習ツアーを企画している。このNPOは、「安房国まるごと博物館」という発想をもち、戦争遺跡もその一

部であるという視点から案内を行っている。

もう一つの調査先である宇佐市は、宇佐海軍航空隊基地の町であった。市内には、コンクリート製掩体壕が10基残っており、そのうちのひとつ、城井一号掩体壕は1995年3月市指定の文化財（第2次世界大戦期の遺構の史跡指定は、1990年沖縄県南風原陸軍病院壕に続き全国で2番目）となった。宇佐市は、戦争と平和を考えるシンボルとして、その中のひとつの壕と用地を購入し、史跡公園として駐車場等を整備している。さらに、現在、残存している戦争遺跡の保存活用にむけて、整備をおこなうための委員会を立ち上げている。

シンポジウム



2010年12月5日（日）、加西市健康福祉会館で、「加西・鶉野飛行場跡 一戦争遺産をまちづくりにどう活かすかー」が開かれた。2008年度からの共同研究の成果を披露し、今後の活用についての意見交換を行うためであった。

基調報告は、関西学院大学・高岡裕之教授による「鶉野飛行場の歴史的意義・価値」。また長年飛行場跡の保全活動に取り組んできた上谷昭夫氏（鶉野平和祈念の碑苑保存会）が、写真スライドを用いて、現存する鶉野の戦争遺跡の紹介をし、本学地域連携推進室佐々木和子研究員が、各地の戦争遺跡の活用事例について、人文学研究科の坂江渉特命准教授が、鶉野周辺を含む加西の歴史遺産について報告した。

報告のあと、奥村弘地域連携推進室長のコーディネートによって、食資源教育研究センター長伊藤一幸教授や中川暢三加西市長にも加わり、パネルディスカッションが行われた。

地元鶉野地区の方々からの意見も加わり、活発な議論が行われた。市長からは、歴史に学び、

残された歴史遺産・文化遺産を活用して教育やツーリズムに活かすなど、新たな加西市を創造し、未来を切り拓いていくことが大きな課題であると、挨拶があった。

加西市には、農学研究科附属食資源教育研究センターの所在地である。本学では、大学施設所在地の自治体との連携を重視してきた。協定の締結により、両者は相互発展のため、文化、教育及び学術の分野で連携・協力し、生涯学習に関する諸問題、加西市の文化遺産を活用した地域との連携事業について、協同で研究等に参画することになった。昨年来、実施してきた旧海軍鶉野飛行場戦争遺跡調査もこの中に位置づけられる。

(文責・佐々木和子)

伊丹市における連携事業

1、伊丹酒造組合との連携事業

平成 22 年度は伊丹酒造組合の中核である小西酒造株式会社の創立 460 年にあたり、それに伴う種々の事業が行われた。このなかで伊丹酒造組合主宰の「酒造家史料を読む会」が行ったのは「幕末（慶応 3 年仕込み）の江積み清酒「白雪」の復刻と「小西新衛門文書の世界」展である。



幕末の白雪については、これまでに元禄 15 年・文政 8 年の白雪を復刻してきたので迷うことなく決った。元禄・文政・慶応の 3 種の酒を比べて、同じ「白雪」がどのように変化したかを如実に目で見、舌で感じる事ができた。当時の史料によると、酒は甘口・濃造りから辛口薄造りへとニーズが変わって行くのだが、酒造りもそれを反

映して甘口・濃造りから辛口・薄造りになっている。当時の酒仕込み帳などの数字をみて、このような変化は推測できるのだが、実際の味・色・アルコール度数等は酒ができあがってみないと分からないことである。これらの酒は販売されている。

「小西新衛門文書の世界」展は、平成 22 年 11 月 6・7・8 日、小西酒造長寿蔵ミュージアムにおいて開催された。小西新右衛門文書は膨大なものだが、単独に展示会を開くのは始めてである。古文書展など、酒造会社の社員にとっては初めてのことであり、会場の設営や照明、史料のセレクト、告知方法等、広い会場でどうなることかと、心配されたふしもあったようだが、3 時代の白雪の試飲もあり、好評のうちに無事終わることができた。大きな収穫は「古文書ってすごい」という感想を改めて実感した社員が多く、4 月から「酒造家史料を読む会」への入会希望者が数人いたことである。入場者数およそ 450 名。

11 月の「小西新衛門文書の世界」展に先立ち、10 月 25 日、東京支店でミニ展示と講演会が持たれた。参加者は酒販業者が中心の内見会である。酒販業者だけに質問が多く一般的な展示会とはまた違った雰囲気であった。参加者数およそ 90 人。

企業との連携事業は、企業であるだけに研究段階で終わることなく、企業イメージを高め、賞品としてそれが販売と結びつかなければならないという緊張感はあるが、やったことの意味がよく見え、得がたい経験を積むことができた。

開催については、①小西新右衛門氏文書の存在、②同地で蔵元としてずっと操業していること、③「酒造家史料を読む会」メンバーの熱意、④会社の理解、⑤会場の立地場所（JR 伊丹駅・阪急伊丹駅の間、両駅から徒歩 5 分）などの点で恵まれていた。さらに会社がミュージアムを持っており、全会場を使うことができたことが大きかった。

2、伊丹市御願塚地区での連携事業

4 年前から御願塚史跡保存会の 6 人によるプロジェクトチームで同地区のイラストマップ作りが始まり、平成 22 年 5 月に完成した。マップは「御願塚ふるさとマップ」と題し、1 万部作成さ

れた。

作ることになったのは、この地域は旧集落の真ん中に新幹線の高架があり、旧集落が南北に二分されているが、古い景観が色濃く残っているにもかかわらず、住んでいる人たちは、ここは御願塚古墳（全長およそ 50 メートルの帆立貝式前方後円墳、県指定文化財）しかない、あとは何もない、と誰もがいい、この地区への新規参入者にとっては以外であった。

そこでまず小さな情報紙を作って自治会で回覧することを提案し、何度か発信したあとでマップを作ることになった。保存会の会長・副会長でメンバーが指名され、時間的な制限はなく作業が始まった。ここで大きな力になったのは、尼崎富松地区の富松城址の保存から出発し、まちづくりに活躍している宮司さんが当地区の氏神の宮司さんを兼帯されており、メンバーのお一人だったことである。

実際にマップ作りが始まると皆さん熱心に活動され、そんなものに何を入れるのかと訝っておられたメンバーも、収録するものの選択より切り捨てるものに苦勞するようになった。そして 4 年を経て「御願塚ふるさとマップ」が完成した。

この間に感じたことは、この地区の人たちの余裕である。置場がなくなった大きな龍吐水を引き受けてくださる方、村の博物館を設けてくださっている方、古墳の濠の浄化作業に熱心に取り組まれている方、文化財愛護少年団の指導を長年やっておられる御夫婦等々。

御願塚の住民であることに誇りを持っておられる方が多いと思った。屋敷の広さやご家族の理解も欠かせない。このような余裕で地域の景観が守られていることを強く感じた。

マップの刊行記念として、2010 年 11 月 27 日に当地区の自治会館において「江戸時代の御願塚村と村絵図」展として古絵図の展示と講演、パネルディスカッション「マップ作りからわかったこと」を開催、およそ 50 人の方が参加された。

（文責・石川道子）

3. 伊丹市立博物館との連携事業

伊丹市立博物館で開催された展示「平成 22 年度秋季企画展 阪神・淡路大震災 15 年 伊丹からの発信」（2010 年 10 月 2 日～11 月 21 日）に

おいて、学生が中心となって展示の一部を作成した。

なお、これは 2010 年度前期の文学部・人文学研究科の授業の一環でもある。科目名は、学部「日本史演習」、博士課程前期課程「日本近世史演習」、博士課程後期課程「古典力発展演習Ⅱ」（大学院教育改革支援プログラム）である。

以下は主な授業日程である。4 月 9 日…授業開始、5 月 28 日…神戸大学附属図書館の震災文庫を見学、6 月 6 日…伊丹市内をフィールドワークし、その後伊丹市立博物館を見学。6 月以降は、授業内で展示の内容の打ち合わせ、資料の整理、展示の作成をおこない、8 月 4 日、17 日、30 日にも展示作成のための補講をおこなった。また 7 月 30 日には阪急伊丹駅の復興に関わった職員の方に対する聞き取り調査をおこなった（参加学生 3 人）。

10 月 17 日には企画展に関する歴史講演会がおこなわれ、佐々木和子・奥村弘・三輪泰史の 3 氏が講演をおこなった。

学生が担当した展示内容は 3 つである。①伊丹市内に残る震災関係モニュメントの紹介、②伊丹市に届けられた救援物資の分析、③学生が選んだ震災時の写真の展示、以上である。

①に関しては、フィールドワーク時に写真に撮影し、地図とともに図録に収録された。モニュメントの中には倒れた鳥居などをモニュメントとしてあるものもあり、非常に興味深いものであった。

②については、救援物資の帳簿をもとに、物資の内容やどこから送られてきたのかといった特徴を分析し、表などにしてパネル展示をおこなった。分析から通じてわかってきたのは、伊丹市内からの物資が多いということであった。また学生から見て「なぜこれが送られてくるのだろうか」と感じる救援物資もあったようである。

③について、これは②とも関連するが、学生は震災時に非常に若く（現在 20 歳の学生は当時 5 歳）、そのような若い世代から見たときに、震災のどのような部分に着目するかが、当時震災を体験した世代と異なるのではないかと問題意識があった。最初に書いてもらった学生のアンケートによれば、震災についてほとんど記憶がないという記述もある一方、震災時に布団をかぶったことやニュースなどの報道を見たことを覚えているとい

う声もあった。

若い世代が震災をどうとらえるか、そしてそれをどう伝えるかを考える貴重な事業であった。

(文責・深見貴成)

宝塚市の山本共有財産管理組合主催の 「山本村の絵図展」開催への協力

平成 22 年 4 月 8 日から 11 日まで 4 日間、宝塚市山本のアイアイパークにおいて、例年行われている植木祭と同時開催で「山本村の絵図展」を行った（センターからは松下・河野・石川）。

21 年に、山本共有財産管理組合長藤本氏宅に保管されている多数の古絵図をどうしたものかというお話が、宝塚市史資料室の七条氏のもとに持ち込まれことから始まった企画である。

もともと分かりやすく、地域の方々に示すことができるのは絵図の展示である。そこで展示会が計画された。絵図は大判のものが多く、保存状態もおおむねよかったが、展示に先立ってまず古絵図の修復を専門業者に依頼し、そのあいだに開催に向かって絵図に関係する史料や、地域の産業である植木関係の史料を集め、会場を決める等の作業を進めた。

開催に関しては宝塚市史資料室の協力が大きく、また当日の会場の受付、案内などには管理組合の方々が順番に出られた。入場者数およそ 430 人。

後日、旧山本村の枝村地区の史料の保管状態の確認にうかがった。どこでも同じであるが、地域の人々が以外に地域の古文書などの史料の存在を知らない。種々の理由があるが、そのうちに、どうなったのか、どこへ行ったのか所在がわからなくなったということに遭遇することがある。虫干しの意味も兼ねて時々の史料の所在確認が必要であろう。

(文責・石川道子)

尼崎市における連携事業

昨年度より引き続き、中世長洲荘関係の史料を多く含む京都大学総合博物館所蔵「宝珠院文書」についての研究会をおこなった。

第 5 回の研究会では、2010 年 3 月 12 日には研究会として、新『尼崎市史』研究会に参加した。

第 6 回は 5 月 27 日に大村拓生「在荘下用日記」を読む」、第 7 回は 7 月 9 日に市沢哲「教性と澄承一殺害事件と悪党事件を考え直す」、第 8 回は 9 月 17 日に伊藤啓介「舟屋法眼元恵」について」、第 9 回は 10 月 22 日に天野忠幸「藤岡氏について」、第 10 回は 2011 年 1 月 14 日に「下代益富能光について」の各報告がおこなわれた。

(文責・村井良介)

三田市での連携事業

今年度は、三田藩家老九鬼家文書群のうち第 1 次調査分の目録作成作業をおこない、3 月末に刊行した。

九鬼家文書は、九鬼家住宅が三田市へ移管されるさいに確認された大規模資料群である。具体的な目録データの再点検、改訂作業、目録体裁整備は、板垣と澤井が担当した。目録刊行にあたり、市民的関心を喚起するために、前半部分に解題と 10 本のコラムを執筆し、従来の史料目録にはない珍しい体裁を採用したことが特色である。コラムの執筆は、三村、添田、河野、板垣、澤井が担当した。

(文責・板垣貴志)

猪名川町との連携事業

猪名川町との間では、すでに 2009 年度以来、猪名川町生涯学習センター主催の市民向け講座「リバグレス猪名川」の開催協力をおこなってきた。今年度は、2010 年秋に猪名川町公民館長の林芳則氏より申し出があり、2011 年 4 月から約 1 年かけて開かれる『リバグレス猪名川（第 13 期生・A コース「歴史と文化」）』について、講師派遣することになった。本企画は 3 年間かけた計画講座で、2011 年度には古代史、2012 年度は中世・近世、2013 年度は近現代史という見通しが立てられた。2011 年度の講座内容編成については本センター教員の坂江が立案し、トータル 15 回にわたるコース内容が決まった。開講日は 2011 年 5 月 14 日、修了式は 2012 年 3 月 3 日の予定である。

(文責・坂江渉)

三木市との連携事業

今年度より、文化庁の地域伝統文化総合活性化事業に「三木市文化遺産活用・活性化事業～三木市文化遺産再発見によるまちづくり～」が採択された。三木市観光振興課の担当者および三木市観光協会の職員と協議を重ね、事業を展開した。

昨年度リニューアルオープンした旧玉置家住宅を活動拠点に、玉置家に保存されていた文書群の整理を進めている市民グループの活動を支援した。

具体的には、下張り文書剥がし作業班、古文書解読作業班の2グループの活動を支援した。前者に対しては、以前より活動を指導してこられた尾立和則氏（保存修復専門家）からのアドバイスを受けた。後者に対しては、三村、板垣が対応して下張り文書の解読作業を進めた。



また、今年度は旧玉置家住宅にて3回の報告会と1回の展示補助をおこなった。報告会の内容は、第1回（2010年7月2日）は、板垣が「三木市をめぐる地域史研究の課題と意義」と題して三木の地域史の現状と課題、下張り文書剥がし作業の意義を報告した。第2回（2010年8月18日）では、板垣が下張り文書のなかから、享保期甘藷奨励文書を解読し紹介した。この内容は、後日の展示へ活用された。

第3回（2011年3月27日）では、「歴史文化を探るセミナー」として、奥村弘が「まちづくりと地域歴史遺産」と題する総括的報告をおこない、その後板垣が旧玉置家住宅に伝来する勝海舟直筆の手紙を解読・紹介した。3回の報告会はいずれも活発に意見が飛び交い、盛会であった。下

張り文書剥がし作業1周年記念の2011年2月20日に向けて、展示補助をおこない、史料解読や展示キャプションを作成した。

（文責・板垣貴志）

明石市との連携事業

2010年7月6日に兵庫県立図書館の宮本博氏より、明石藩家老・黒田家関係の資料群について調査依頼があった。後日、明石市教育委員会・文化財担当課長兼地域連携課文化財係長の稲原昭嘉氏と協議した結果、センターの協力のもと、以下の要領で整理・調査作業を進めていくことが確認された。

- ①伝来の刀・鉄砲は、明石市に寄贈する。
- ②資料保管庫を整理し、一般家庭用品（廃棄）と歴史的文化財とを分別する。
- ③センターで明石藩・黒田家の調査・レポートを作成する。なお、レポート作成は山崎善弘氏・橋本寛子氏に依頼し、特別経費プロジェクトとの共同研究として進める。
- ④兵庫県立図書館・明石市教育委員会で、『明石市史』編纂史料・複写史料の現状を確認する。
- ⑤明石市教育委員会は、②③④の成果をまとめて、来年度の予算を請求する。

以上をふまえて、以下の日程・参加者で同資料群の整理・調査を行った（センター関係者参加日のみ記載）。

- ・第1回 2010年7月14日
参加者：奥村、三村、添田
- ・第2回 2010年8月2日
参加者：添田
- ・第3回 2010年8月24日
参加者：三村・山崎・橋本・添田
- ・第4回 2010年9月13日
参加者：三村・橋本・添田
- ・第5回 2010年10月2日
参加者：三村・山崎・橋本・添田
- ・第6回 2010年10月12日
参加者：山崎・橋本

調査の結果、資料群には明石藩家老の日記や藩政にかかわる記録が100点前後含まれており、内容的にも貴重なものであることが確認された。また、著名な画家による屏風や掛け軸などの美術品も多くのこされており、今後これらの作成年代や作成者の特定を進める作業が必要であることも確認された。

以上の調査結果をまとめ、センターで資料概要を作成して明石市教育委員会に提出し、来年度事業費を確保することができた。

来年度は、神戸大学と明石市との連携事業として、引き続き黒田家文書の詳細な調査を進めるとともに、多方面の研究者と協力しながら、同資料群の保全・活用に向けた提案を行う。(文責 添田仁)

たつの市との連携事業

たつの市との間では、旧新宮町の『播磨新宮町史』の編纂事業を通じて密接な連携関係を保ってきた。前近代史料編の刊行後に結成された「神戸大学近世地域史研究会」(大学・行政関係者と市民の3者で構成)では、毎年、地元史料の整理・調査作業を行い、それを通じて地道な研究成果をあげつつある(詳細は第11章「研究」欄を参照)。

また昨年2月28日の「たつの市町史第一次完成記念シンポジウム」の翌日に開かれた西田正則市長と奥村弘事業責任者らとの懇談会(たつの市役所市長室にて)では、

- ①今後も、市町史や歴史文化を活かしたまちづくりの分野において、連携関係を継続していくこと、
- ②必要ならば次年度から、具体的な計画や予算処置において部内(教育委員会)で検討させること、などの点が確認された。

これを受け、①については、2010年10月20日～12月26日、たつの市立埋蔵文化財センターで開催された特別展示会「播磨国風土記の世界一揖保川流域を中心として」に対して本センターを中心とする古代史研究者が協力。図録の作成にあたり坂江渉と高橋明裕氏(立命館大学非常勤講師)が分担執筆、市民向けの連続講座「風土記と地域の歴史遺産を考える」(全3回)では、坂江・高橋のほか、古市晃氏が講師を担当した。

一方②については、残念ながら、たつの市側の種々の理由により、計画立案や予算処置の具体化はすすまなかった。

そのため2010年11月29日には、たつの市の吉益美奈子氏とセンター側(奥村弘・河野未央・添田仁・坂江渉)との間で、次年度以降の活動について打合せ会がおこなわれ、以下の点が確認された。

- ・たつの市と大学との間で、刊行済みの自治体史や地域資料を、長期的な視野で活用する事業をすすめること。
- ・いひほ学研究会や神戸大学近世地域史研究会など、たつの市内の関連団体同士の交流企画の開催協力。
- ・西田市長が提起した市内における「山と海との交流展」の共同開催。
- ・それぞれについてコストに見合ったやり方をすすめること。
- ・歴史文化を担う人材育成の面で双方が協力しあい、近いうちに連携協定を締結することを模索する。

現在、以上の点をめぐり、たつの市側の対応待ちの状況であり、またすぐに共同してできる事業については実現化していきたいと考える。

(文責・坂江渉)

福崎町との連携事業

本年度も引き続き辻川界限検討委員会(2010/10/13)に出席し、三木家住宅修復後の活用について提言を行った。

2010年5月22日には神崎郡歴史民俗資料館連続講座「地域の歴史文化遺産をつなげよう」にて、松下正和氏による講演が行われた。

また連続講座第4回(11月13日)において、山崎善弘が「姫路藩の大庄屋三木家の職務について」と題して講演を行った。約40名の参加者があり、質疑応答では、三木家が「大庄屋を務めていたことは知っていたが、具体的にどのような職務をこなしていたのかは初めて知った、という趣旨の感想が数人から出された。また、自分の居住地の歴史が知られてよかったという感想も寄せられた。

7月13日、8月31日～9月1日に歴史民俗資料館にて史料調査を実施、その成果を報告書にまとめるとともに、歴史民俗資料館の秋の特別展『姫路藩とふくさき～播磨国のふくさき絵巻～』(2010/10/23～11/23)及び企画展(2011/3/2～31)に反映した。さらに3月12日には『ふるさと再発見～小さな気づきが歴史をつむぐ～』と題するシンポジウムを実施し、町民の方への研究成果の還元に努めた。さらに三木雅雄氏所蔵史料について、2月20日、3月8日～9日に大阪大学大学

院文学研究科懐徳堂研究センターにて史料調査を実施した。また WEB ページ「ふくさきの歴史～大庄屋三木家～」

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/fukusaki/index.htm>1 をアップし、昨年度事業内容の情報発信を行った。さらに今年度より福崎町広報にて隔月で記事を寄稿し(2011年1月号・3月号)、三木家や福崎町の歴史の解説を行っている。次年度は WEB ページの定期的更新と情報拡充に努める予定である。(文責：河野未央、山崎善弘)

佐用町との連携事業

佐用町(文化財担当者・藤木透氏)との間では、自治体合併以前から、史料保全をめぐる市民向け講演会への講師派遣(2005年度)、2009年夏の台風23号水害後の史料ネット活動の援助・協力等を通じ、かなりの結びつきができていた。それらを踏まえ、今年度から具体的な事業が動き出した。

(1) I家所蔵文書の調査

兵庫県教育委員会文化財室の村上裕道氏から、佐用町内のI家において、2010年10月、同家の建造物調査がヘリテージマネージャーの手によって行われる、同家内にはかなり古文書が所蔵されているとの旨の連絡があった(2010年4月)。

これを受け、本センターと佐用町教育委員会が共同して、同家の所蔵文書の概略調査を2度にわたって実施した。1回目が6月1日、2回目が10月3日。この調査内容については、松下正和氏による報告書が作成済み(センター内で保管)。

(2) 佐用町「伝統文化再発見活性化事業」への協力

佐用町教育委員会では、文化庁の委託事業「地域伝統文化総合活性化事業(二次募集)」に採択され、平成22年度～24年度の間、上記事業を地元の研究団体「佐用郡地域史研究会」と共同して行うことを決定。本センターは、この事業に協力する依頼をうけた。

これにもとづき平成23年2月15日～16日と3月15日の3日間、佐用町文化情報センターにて「地域資料の取扱い学習会」が開かれ、松下正和・三村昌司・木村修二・河野未央・坂江渉の5名が、古文書の整理・取扱作業の指導等を行った。



参加者は佐用郡地域研究会の会員のほか、一般市民若干名で、毎回15名程度の方々が熱心に古文書整理作業のワークショップに加わった。本事業は形を変えた上で来年度以降もつづけられる予定である。(文責：坂江渉)

『新修神戸市史』の編纂事業

地域連携センターが調査・編集に協力した『新修神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世』が、2010年3月28日付で刊行された。また同日刊行記念講演会「新市史編集から見てきた神戸の古代と中世」が神戸市勤労会館において開催された(主催：神戸市(文書館)・新修神戸市史編集委員会、協力：神戸市教育委員会・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター)。古代史部会部会長の栄原永遠男氏が「神戸の古代を考える」、中世史部会部会長の元木泰雄氏が「大輪田と兵庫津—中世神戸の諸相」と題して講演をおこない、また合わせて神戸市教育委員会文化財課による神戸市域の出土遺物とパネルの展示がおこなわれた。

(文責：村井良介)

『三田市史』の編纂

『三田市史』は、古代から近世までを扱った通史Ⅰが2010年度に刊行され、引き続き近現代を取り扱った通史Ⅱが2011年度半ばに刊行される予定である。

通史Ⅱには、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの教員・研究員が、調査・執筆に携わっている。2010年度は、各自の調査・執筆活動を進めたほか、ほぼ毎月部会を開催して研究成果

の発表、進捗状況の確認などを行ってきた。

また、三田市史に関わる事業の一環として協力している兵庫県立三田祥雲館高等学校の教育支援では、12月16日(木)午後「祥雲館文化セミナー」を行った。前半は、高校生と地元住民を対象に、センター教員が地元の史料を使って米騒動に関する講演を行い、後半は大正期の米屋の帳簿などをもとに、近代の農村における米屋の役割や米価の変化について史料から読み取るワークショップを行った。

(文責・河島真)

『香寺町史』の編纂と活用事業

昨年度に編集がほぼ完了した『香寺町史 村の歴史』通史編の刊行は、予算執行の問題から2010年度内には実現されず、2011年度に持ち越されることとなった。

町史の活用に関しては、まず姫路市香寺町犬飼自治会と「歴史文化の保全・活用に関する覚書」を2010年4月に取り交わし、刊行された『香寺町史』の活用や収集された歴史資料の保全と公開・活用を図ること、そして犬飼公民館をそのための活動場所とすることが確認され、実施に移された。

また、2010年6月から2011年1月まで、月に1回のペースで「町史を読む会」が開催され、地域連携センターから講師を派遣した。以下がその日程等の記録である(名前は講師名、人数は参加者数、場所は、1回目は香寺公民館、2回目以降は犬飼の県民交流会館)。



① 6月9日坂江渉(古代・15人)、② 7月14日坂江渉(古代・19人)、③ 8月18日樋口健太

郎(中世・17人)、④ 9月15日村井良介(中世・13人)、⑤ 10月13日木村修二(近世・10人)、⑥ 11月10日添田仁(近世・11人)、⑦ 12月8日三村(近現代・13人)、⑧ 1月12日深見貴成(近現代・16人)。

この町史を読む会は『香寺町史』通史編執筆者が毎回執筆した内容などを報告するもので、古代・中世・近世・近現代と2回ずつおこなった。各講師が自分の専門を活かした特色ある内容になった。

2月10日には、香寺歴史研究会主催(地域連携センター共催)で、「フォーラム 大字誌をつくる」が開催され(参加者46人)、活発な議論が交わされた。このフォーラムは松下正和氏が講師として丹波市などの字誌づくりの事例を紹介するとともに、地域における歴史文化を伝えていく重要性について講演した。また坂江渉氏が小野市の事例を紹介した。香寺町内からは相坂の駒田新安氏が『相坂の語りべ』編纂の過程について、北恒屋の炭谷丈夫氏が今後編纂を予定している字誌について報告した。

また福崎町田口の豊國和好氏と神河町越知の松原良道氏が、それぞれの地区の字誌づくりについて実践報告をおこなった。

報告後の議論においては、字誌をつくる予算をどう確保するかという点や、女性や子どもにどのように関わってもらえばよいのかという論点が出された。

このフォーラムの特徴は、香寺町外からも事例報告があったことである。こうした地域間の交流が進むことで、地域歴史文化について幅広く考えることができる環境がさらに作られることになると期待される。

なお、2011年度は、大字誌づくりが進められるとともに、刊行される予定の『香寺町史 村の歴史』通史編をもとに活動が行われる予定である。(文責・大槻守、深見貴成)